



# 文化学園リポジトリ

Academic Repository of BUNKA GAKUEN

服飾文化共同研究拠点／文化ファッション研究機構

Joint Research Center for Fashion and Clothing Culture / Bunka Fashion Research Institute

文化学園大学

*Bunka Gakuen University*

文化服装学院

*Bunka Fashion College*

文化ファッション大学院大学

*Bunka Fashion Graduate University*

文化外国語専門学校

*Bunka Institute of Language*

|            |   |
|------------|---|
| Title      | ACTFL_OPI初級から超級に見られた相槌の分析   |
| Author(s)  | 齋藤, 真理子   |
| Citation   | 文化女子大学紀要. 人文・社会科学研究 7 (1999-01)<br>pp.157-172                                   |
| Issue Date | 1999-01-31  |
| URL        | <a href="http://hdl.handle.net/10457/2681">http://hdl.handle.net/10457/2681</a> |
| Rights     |   |

## 〈研究ノート〉

# ACTFL-OPI 初級から超級に見られた相槌の分析

齊 藤 眞理子

## An Analysis of “Aizuchi” Found in ACTFL-OPI Tapes Ranging from Novice-High to Superior

Mariko Saito

**要 旨** ACTFL-OPI で初級から超級と判定されたインタビューテープ11本の中で使用された相槌を被験者の会話能力レベルとの関連において分析した。まず機能の面から、相槌として使用されたものとそれ以外の機能で使用されたものに分類し、使用状況を調べた。次に、相槌と分類されたものの語種と使用回数、相槌直前の形式、適切性などについて考察した。

その結果、使用回数について、上級者以上は中級者以下のものより相槌使用が多いことは指摘できるが、会話能力が上がるにつれて漸次使用数が増えるというような相関は認められなかった。語種について、どのような相槌を使うかには個人差があるが、使用語種の範囲の広がりには会話能力レベルとの関連が窺われた。相槌直前の形式の分析では、漸次多くなるという変化ではないが、中級の上以上の被験者は中級の中以下のものより自発的な相槌の割合が多く、接続助詞・接続詞の後で打つ相槌も多いことが見られた。

分析結果を基に、OPI 基準の相槌に関する記述の具体的な内容について推論を試み、中級者、上級者、超級者の相槌使用の特徴について考察した。

### 0. は じ め に

日本語における相槌は「質と量においてかなり特徴的なもの」（水谷信子1988）と見なされている。相手が話し終わるまで待ち、それに対して話し始める「対話」に対して、話の途中でもしきりに相槌を打ち、共同で一つの流れを作る日本的な話し方は「共話」（水谷信子1984）とも呼ばれる。水谷修（1975）は、英語による話のやりとりをピンポンやテニスに例え、日本語の場合をバレーボールに例えている。日本語学習者が相槌を打つ際にはこのような頻度やタイミングの違いだけでなく、どのような表現を使うかにも問題はあつた。欧米系の学生が発する「Uh huh」という相槌に気分を害したり、中国系の学生が多く使う待遇レベルの低い「ウン」という相槌に慣れ慣れしさを感じたりという経験は、日本語を話す外国人と接する機会のある人なら一度や二度はあるのではないだろうか。相槌を適切に打てるということは日本語会話を円滑に進めるために学習者が身につけなければならない学習項目と言える。

相槌の研究は、話し言葉や聞き手としての行動に対する関心が高まるとともに盛んに行われはじめた。どのようなものを相槌に含めるのかという相槌の定義（堀口1991、メイナード1993）に始ま

\* 本学助教授 日本語教育

り、相槌の機能（堀口1988，松田1988，今石1992，曹1994），相槌に使用される表現（水谷1984，堀口1988），イントネーションとの関係（今石1994），他言語の相槌との比較（メイナード1993，金1993）などの観点から研究が進められ，次第に相槌の諸相が明らかにされてきている。

日本語学習者の相槌使用を分析したものには，大学院生である日本語学習者7組14人を対象に会話を録音し，その相槌の種類と回数を分析した堀口（1990）の研究，20代から40代の男女19名を対象に日本語の発達段階と相槌の習得の関係を分析した渡辺（1994）の研究がある。渡辺によると，相槌の使用頻度と発達段階には相関は見られず，適切さに関しては多くの学習者に「待遇性の低い相槌の不用意な使用」，「そうですか/そうですねの混用」などが共通して見られ，初級者には「母語の相槌の転用」が見られたという。

被験者の日本語会話能力レベルについて堀口の研究では，1）日本語の様々な試験を受けて合格した大学院生であること，2）日本語の授業を受け修士論文を書くこと，から上級と判断されている。渡辺の研究では，日本語学習歴，在日期間，日常生活での日本語使用についての調査と被験者が調査者の質問に答えている1分30秒分の発話資料をもとに数人で判定されたものである。このようにどちらの場合も会話能力の判定は信頼性のあるものとは言い難い。

被験者の日本語会話能力のレベルと相槌にはどのような関係があるのだろうか。本稿は，日本語のレベルが信頼性のある形<sup>2)</sup>で判定された発話資料を対象にして，被験者のレベルに関連すると見られる相槌の側面，あまり関連しないと思われる相槌の側面について考察するものである。

ACTFL-OPI（全米外国語教育協会—インタビュー形式の口頭表現能力試験）では，会話能力を評価するために4つの視点（機能・内容・談話の型・正確さ）を設定している。正確さは，さらに6つの部分に分かれており，その中の言語運用能力について，牧野（1991）は相槌・言い換えを目安として挙げている。牧野によると，中級では，言い換えや相槌が成功することは稀であり，上級では，言い換えや相槌の一部ができるようになり，超級では，相槌や間の取り方に問題がなくなるとされている。ここで，「相槌が成功することは稀」，「相槌の一部ができる」，「相槌に問題がなくなる」というのは具体的にどういうことなのだろうか。その点についての手がかりも得たい。

日本語では，相槌に使用される表現形式と質問や確認に応答する表現形式に同一のものが多く。まず，データに見られたこれら「はい」「そうですか」などの短い表現—「相槌詞」（堀口1988）—を分類し，次に，相槌と分類されたものの種類と使用回数，相槌の打たれた場所，適切性の問題について被験者の会話能力レベルとの関連から分析する。さらに，OPIの相槌に関する記述がどのような状況を述べているのかについてデータをもとに推論を試みる。

## 1. データについて

本稿では，ACTFL-OPIのインタビューテープと書き起こし資料を分析対象としている。ACTFL-OPIによるインタビューテストは，試験官と被験者との対話形式で行われ，様々な話題について質問に答えてもらう対話モード（被験者が試験官に質問をする「逆質問」と呼ばれる部分も含まれている。）とロールプレイを使ったタスクモードの2つが組み込まれている。所要時間は，レベルによって多少違うが，約30分で行われる。会話能力のレベルは初級・中級・上級・超級の4

### ACTFL-OPI 初級から超級に見られた相槌の分析

つに大別されており、さらにサブレベル（初級，中級，上級とも3つ<sup>3)</sup>）が設定されている。今回分析対象としたテープは7人の OPI テスター<sup>4)</sup>によりサブレベルまで判定の一致したものである。ここで、サブレベルの下というのは、そのレベルで必要な内容がcausingことができるレベル、中というのは、そのレベルで必要な内容に加えてその上のレベルのことも時々できるレベル、上というのは、その上のレベルで必要な内容も半分以上できるが、維持できないレベルである。日本人被験者を対象として OPI インタビューを行ったテープも2本、分析対象に加えた。

被験者の背景は表1の通りである。相槌は、性別・年齢・話し癖などの個人的要因、話者間の上下関係・親疎・談話の目的・内容・流れなどの要因で変化すると考えられている（松田1988，堀口1991）。年齢は、インタビューの際特に尋ねておらず、外見・話の内容からの判断によるが、外国人被験者は皆20代後半から30代であり、日本人被験者についてはどちらもインタビュー中年齢が明らかになっており、40代後半である。いずれも初対面で行われた OPI であり、親疎、談話の目的、流れは、同一であると考えられる。レベルにより試験官が尋ねる話題の抽象度は違うが、そもそも被験者の話を抽出するためのテストであり、被験者の相槌は、試験官が話題を提示している部分、逆質問の場面で試験官が答えている部分、ロールプレイの部分で主に使用されている。このため、相槌の起きる状況はレベルを通じてそれほど異なっていないと考えられる。日本人被験者2人は試験官より年上の男性であるが、いずれも試験官と被験者という関係であり、話者間の上下関係はほぼ一致していると見て良いと思われる。

外国人話者の場合、母語による違いも予測されている（水谷修1975，メイナード1987，松田1988）が、渡辺（1994）の研究では、相槌の頻度については国籍による違いは認められなかった。本稿では、分析の際に考慮するにとどめる。

本稿では、表1にあるように外国人被験者をA～Iのアルファベットで示した。また各発話例に

表1 被験者の背景

| 被験者  | レベル | 出身地     | 性別 |
|------|-----|---------|----|
| A    | 初の上 | ギニア     | 男  |
| B    | 中の下 | 台湾      | 男  |
| C    | 中の中 | イギリス    | 男  |
| D    | 中の中 | マレーシア   | 女  |
| E    | 中の上 | オーストラリア | 男  |
| F    | 上の下 | 韓国      | 男  |
| G    | 上の中 | アメリカ    | 男  |
| H    | 上の上 | タイ      | 女  |
| I    | 超   | 韓国      | 女  |
| 日本人1 | 超   | 日本      | 男  |
| 日本人2 | 超   | 日本      | 男  |

は被験者を示す文字とターン番号を示す数字（例：A20）を付け、試験官の発話はRで表示した。また、例文中カタカナで示した音は日本語的でない音韻のものであることを示す。

## 2. 相槌と相槌以外の機能

日本語の場合、「相槌詞」の表現は、質問や確認に対する応答と形式的に同一であるものが多い。日本語学習者の発話を分析する際には、これらの表現がどのように使い分けられているかということも興味のあるところである。質問・確認に対する応答と相槌とを区別するために、まず、「相槌詞」をすべて拾い出し、質問・確認に対する応答と相槌を区別した。その際、被験者の発話末に現れる(1)のようなもの、被験者が答えを考えているときの言いよどみと考えられる(2)のようなものは明らかに機能が異なるため、対象とはしなかった。

(1) R20：大きい町ですか。

A20：あー、大きい町、うん。

(2) H27：タイの新聞と変わった面ですか。

R27：ええ。

H28：うーん、そうですね、うーん、 広くおおざっぱに言うと、～

### 2-1. 相槌の定義

相槌の定義には、「はい」「そうですか」など堀口（1988）が「相槌詞」と名付けた「いわゆる相槌」のみを指す狭義のものと、「繰り返し」—相手の言葉をそのまま繰り返す形のもの—、「文の完結」—話し手の文を聞き手が完結させる形のもの—（水谷1988）<sup>5)</sup>、なども含める広義のものがある。本稿では、「相槌詞」のうち話し手の質問・確認・指示に応答したものではないもので、「聞いている」、「理解している」、「同意している」機能、あるいは、「ふーん」などのような「曖昧な同意」や「本当」などのような「強い興味・関心」を示す機能を持つものを相槌とする。相槌はターンとしていないが、質問や確認に対する応答は、ターンとする。「繰り返し」は、ターンとしては数えていないが、今回の分析には入れていない。尚、うなずき・笑いなどの非言語行動は分析対象から外している。

次に、相槌以外として分類した、1. ターン譲りの反応、2. 確認に対する応答、3. 質問に対する応答、4. 指示に対する了解、5. その他について説明する。

### 2-2. 相槌以外の機能の分類

#### 2-2-1. ターン譲りの反応（ターン譲り）

被験者の発話に対して、試験官が「そうですか」と相槌を打ち、それに対して被験者が答える(3)に挙げるような応答が頻繁に見られた。これは、メイナード（1993）の述べている「話し手が順番を譲ったと見なされる反応」であり、今石（1994）も「あーそうですか」のあと、発話権を持っていたものが「はい」「ええ」と続けた場合かならずと言って良いほど話者交代が観察されたことを報告しており、メイナードも今石も相槌とは区別している。本稿でも、相槌同様ターンとしては数えていないが、相槌とは区別した。

(3) C12：日本では、も、英語の先生します。（あーそうですか。）はい。

## ACTFL-OPI 初級から超級に見られた相槌の分析

R13: あの、日本にはいつ頃いらっしゃったんですか。

「あーそうですか」のみでなく、試験官が、「あ、なるほどね」、「あーはー」などと反応し、それに対して「はい」「ええ」「うん」などと応じている例もここに分類した。

### 2-2-2. 既出情報確認に対する応答（確認応答）

分析対象データが、インタビュー形式の試験であるために次に挙げるような、相手の発話を確認する表現が多く見られた。これらの確認は質問の形をとっており、被験者は答えることを要求されている。

(4) E8: あ、シドニーです。

R9: あ、シドニーですか。

E9: ええ。

### 2-2-3. 質問に対する応答（質問応答）

(5) R51: いいと思ったんですか。

C51: はい。

(5)に挙げたような「はい/いいえ質問」に対する応答をここに分類した。ただ、その質問内容がすでに被験者によって述べられたものである場合は、「既出情報確認に対する応答」に分類した。

今石(1994)は、(6)のように文末の「ね」が省略できない、相手に属する情報についての確認は、疑問文と同様であるとしている。データ収集の際には別に集計してあるが、本稿では、質問に対する応答として示した。

(6) R8: あまり遠くないですね。

B8: はい。

### 2-2-4. 指示に対する了解（指示了解）

試験官からの指示に対して了解を示す(7)のような応答である。「お願いします」という依頼に対する応答もここに含めた。

(7) R56: 私に質問をして下さい。

B56: はい。

### 2-2-5. その他

その他の反応としたものには、それぞれあまり多くはなかったが、次のようなものが見られた。

①挨拶に対する応答: 「初めまして」や、「ありがとう」「さようなら」に対して、「はい」と応答している例。

(8) R1: 初めまして。

A1: はい。

②名乗りに対する応答: ロールプレイの電話の場面で、試験官の名乗りに対して応答したもの。

(9) R78: シュウです。

B78: はい。

③全体の意味の了解: これは、インタビューテストであるために現れたものかもしれないが、試験官に尋ねられていることの意味がそのとき初めて分かったということを示している。「わかった」

という信号ではあるが、単にその文を理解している信号ではなくそれまでのやりとり全体についてやっとわかったという意味なので、相槌とは見なしていない。

(10) R22: あの一、日本人が、あの一英語を習うときに、あの一、どんなことに一番気をつけたらいいですか。

C22: (: )<sup>6)</sup>

R23: どんなことに注意すれば、英語が上手になりますか。

C23: あ一、はい、わかりました。アン:、～

### 2-3. 「相槌詞」の分析

相槌、ターン譲り、確認応答、質問応答、指示了解、その他、に分類して得られた数字を表2に示した。

さて、相槌の頻度に関しては、先行文献の多くで取り上げられているが、その尺度は、1分間の相槌回数、相槌間の文節数、総発話数に対する相槌の比率、100音節あたりの相槌回数など様々である。今回は、全体の素数が小さいこともあり、一回のインタビューに現れた相槌の使用回数を相槌の量的側面の目安として分析をした。

相槌の回数を見ると、Eが23回に対して、Fが43回とEとFの間で伸びている。F以上では、「相槌詞」の約50%以上が相槌として使用されており、E以下の使用状況とは大きく異なっている。この「相槌詞」に占める相槌の割合の差は、相槌が増えていることのみでなく、相槌以外の確認応答・質問応答の数がF以上では減少していることにもよるが、上級者以上と中級者以下の相槌には明らかに量的な差が認められる。

ターン譲りは日本人1とD・Eに多い。超級者Iには2回しかターン譲りが見られず、しかもその2度とも実際にはターンを譲らず話し続けている。渡辺(1994)は、二人が同時に話し始めた際のターン譲りについて、初級学習者の中にはその後も話し続けるものがいたことを報告しレベルとの関連を示唆しているが、ターン譲りは、被験者の日本語のレベルと関連するのではなく、日本人的な話し方に慣れているか否かを示すのではないだろうか。Eについてはわからないが、Dは日本人

表2 「相槌詞」に占めるそれぞれの回数

|         | A   | B   | C   | D   | E   | F   | G   | H   | I   | 日1  | 日2  |
|---------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
|         | 初の上 | 中の下 | 中の中 | 中の中 | 中の上 | 上の下 | 上の中 | 上の上 | 超   | 超   | 超   |
| 相槌      | 25  | 2   | 8   | 25  | 23  | 43  | 32  | 28  | 41  | 37  | 63  |
|         | 29% | 6%  | 27% | 28% | 31% | 69% | 48% | 57% | 79% | 67% | 88% |
| ターン譲り   | 7   | 2   | 2   | 18  | 13  | 2   | 10  | 7   | 2   | 13  | 1   |
| 確認応答    | 20  | 9   | 5   | 23  | 25  | 5   | 10  | 3   | 2   | 0   | 2   |
| 質問応答    | 27  | 14  | 8   | 12  | 6   | 7   | 11  | 5   | 4   | 2   | 6   |
| 指示了解    | 2   | 2   | 5   | 6   | 5   | 3   | 2   | 5   | 2   | 2   | 0   |
| その他     | 4   | 3   | 1   | 4   | 2   | 2   | 1   | 1   | 1   | 1   | 0   |
| 「相槌詞」総数 | 85  | 32  | 29  | 88  | 74  | 62  | 66  | 49  | 52  | 55  | 72  |

と結婚することになっていることがインタビュー中触れられており、日本人との話し方に慣れているものと推測できる。

特徴的なこととして、超級者では、「相槌詞」のほとんどが「相槌」と「ターン譲り」に使用されていることに気づく（I 82%；日 190%；日 288%）。日本語に問題のない自然な会話では質問応答や確認応答はあまりなく、「相槌詞」は主に相槌、ターン譲りなど話し手の話の進行を助けるために使用されていると言えるのではないだろうか。

「はい/いいえ質問」に対する応答は、A・Bに目立って多い。そして、レベルが上がるにつれて少なくなる。これは、被験者の発話のわかりにくさを反映しているものと思われる。被験者の発話が不明確なため試験官の方で答えやすい「はい/いいえ質問」を使用して尋ねているものと思われる。

### 3. 相槌の分析

では、次に相槌について見てみよう。被験者に関する内容について話しているとき、話すスピード、強調などにより、確認や質問に近くなることがある。試験官が、はっきりとした質問の形で聞いている場合は「既出情報確認に対する反応」として相槌以外に分類しているが、質問の前提として持ち出している(ii)のような場合には相槌とした。

(ii) 69R：日本に来られて3ヶ月（H：はい）ということでしたが、これからのご予定はどういうふうに。

このような例は、A 2回、C 1回、D 5回、E 2回、G 2回、H 2回、I 1回、日本人2に3回あり、相槌に分類されているが、自発的に打たれた相槌とは考えられないため、結果を考察する際に考慮するものとする。

3-1 では、各被験者の使用した相槌の種類を、3-2 では、それぞれの相槌が試験官の明示的な要請に応じたものなのかどうか、そしてどのような場所で打たれているのかについて、3-3 では、不適切な使用について調べる。

#### 3-1. 各被験者の使用語種の分析

相槌に使用された言葉を表3にまとめたが、この際、「はあ」と「はあね」のような終助詞の有無、「はい」と「はいはい」などの繰り返しは、水谷（1984）も述べているように相槌の与える印象が異なると思われるので、別の表現として数えた。また、「そう」と「あ、そう」のような間投詞の有無も別の表現としてまとめた。さらに、それぞれの被験者の使用状況を大局的に捉えるために、「あー」系、「うん」系、「ええ」系、「はい」系、「そう」系は、それぞれまとめて示した。

今石（1992・1993）は相槌の機能について、相手の情報の意図が不確定の段階で理解していることを示す「はい」、「ええ」、「んー」などの「促進型」の相槌と、相手の情報の意図が確定したときに理解していることを示す「あーそうですか」、「そうですね」、「なるほど」などの「完結型」の相槌に分類できると分析している。この知見に基づき、完結型の相槌を網かけで示した。A（初の上）：10種類の相槌が使用されているが、すべて「あー」、「うん」、「はい」のバリエーションで、「そう」系は一つもない。また、使用されている「あー」も納得を示すような尻下がりの



表 3-1 相槌に使用された表現

| A      |    | B    |    | C       |    | D    |    |
|--------|----|------|----|---------|----|------|----|
| 初の上    | 回数 | 中の下  | 回数 | 中の中     | 回数 | 中の中  | 回数 |
| あー     | 1  | うん   | 1  | うーん     | 1  | あー   | 1  |
| アーン    | 1  | はい   | 1  | はい      | 1  | はー   | 1  |
| うん     | 5  |      |    | そうです×   | 1  | はい   | 21 |
| フン     | 1  |      |    | そうですか   | 3  | あ、本当 | 2  |
| んー     | 4  |      |    | あーそうですか | 1  |      |    |
| はーい    | 1  |      |    | あ、そうですか | 1  |      |    |
| はーいはい  | 1  |      |    |         |    |      |    |
| はい     | 8  |      |    |         |    |      |    |
| はいはい   | 2  |      |    |         |    |      |    |
| はいはいはい | 1  |      |    |         |    |      |    |
| 相槌総数   | 25 | 相槌総数 | 2  | 相槌総数    | 8  | 相槌総数 | 25 |

表 3-2 相槌に使用された表現

| E            |    | F          |    | G       |    | H       |    |
|--------------|----|------------|----|---------|----|---------|----|
| 中の上          | 回数 | 上の下        | 回数 | 上の中     | 回数 | 上の上     | 回数 |
| あー           | 1  | あ、はい       | 3  | はい      | 23 | うーん     | 1  |
| うん           | 5  | はい         | 29 | はあ、はあ   | 1  | ええ      | 9  |
| うんですね×       | 1  | はい、わかりました  | 1  | はー、ふんふん | 1  | はい      | 12 |
| ふふん×         | 1  | はいはい       | 1  | ふーん     | 1  | あ、はいはい  | 1  |
| ええ、          | 1  | あ、そうですか×   | 4  | あ、そうですか | 5  | そうです    | 2  |
| ええ、そうします×    | 1  | そうですか      | 1  | あ、そう×   | 1  | そうですね   | 2  |
| そう           | 1  | あ、そうですね    | 1  |         |    | はい、そうです | 1  |
| そうそり         | 1  | あ、そうですね、はい | 1  |         |    |         |    |
| そうですね×       | 1  | そうですね、はい   | 1  |         |    |         |    |
| あーそう         | 2  | それです×      | 1  |         |    |         |    |
| あーそうあーわかりました | 1  |            |    |         |    |         |    |
| あーそうそりわかりました | 1  |            |    |         |    |         |    |
| あーそうですか      | 2  |            |    |         |    |         |    |
| あーそうですね×     | 2  |            |    |         |    |         |    |
| あーそうなんですか    | 1  |            |    |         |    |         |    |
| あ、うんなるほど     | 1  |            |    |         |    |         |    |
| 相槌総数         | 23 | 相槌総数       | 43 | 相槌総数    | 32 | 相槌総数    | 28 |

\* 表中の×印は、不適切な使用を示す。

ACTFL-OPI 初級から超級に見られた相槌の分析

表 3-3 相槌に使用された表現

| I       |    | 日本人 1        |    | 日本人 2      |    |
|---------|----|--------------|----|------------|----|
| 超       | 回数 | 超            | 回数 | 超          | 回数 |
| あー      | 2  | あー           | 1  | あー         | 1  |
| うーん     | 3  | うーん          | 2  | うー         | 2  |
| うん      | 4  | うん           | 10 | うーん        | 3  |
| はい      | 27 | ええ           | 11 | うん         | 6  |
| あーそうですか | 3  | はい           | 5  | ええ         | 5  |
| あ, そう   | 1  | はいはい         | 1  | あ, はい      | 1  |
| あ, 本当   | 1  | そうですね。       | 2  | はい         | 22 |
|         |    | そうですね, ええ。   | 2  | はいはい       | 1  |
|         |    | それですね。       | 1  | はあ         | 2  |
|         |    | あーそうか        | 1  | そうですね。     | 13 |
|         |    | うーん, なるほどねー。 | 1  | あ, そうですね   | 2  |
|         |    |              |    | えーそうですね    | 1  |
|         |    |              |    | そうですね, ええ。 | 1  |
|         |    |              |    | そうですそりです   | 1  |
|         |    |              |    | ほんと        | 1  |
|         |    |              |    | なーる        | 1  |
| 相槌総数    | 41 | 相槌総数         | 37 | 相槌総数       | 63 |

ものではなく語尾が平板に延ばされており、相槌とはっきり認定しがたいものである。さらに、「アーン」、「フン」などは、日本語的な音韻ではない。

B (中の下): 「うん」1回, 「はい」1回しか使われていない。

被験者 A・Bとも完結型の相槌は使用していない。

C (中の中): 8回のうち6回が「そう」系のものである。「はい」は、質問や確認に対する応答では使用されているが、相槌としては、(12)に示した1例出現したのみである。さらにこの1例も、被験者に関する事柄について話しており、しかも直前にポーズもあり、質問に近い状況で使用されていることが指摘できる。

(12) R17: あー, 外国であの教えていらっしたんですね。

C17: そうです。

R18: 日本の他の国でも, (はい) 英語を教えていらっしたんですね。

D (中の中): 質問や確認に対する応答では、「そうです。」「そうですね。」が使用されているが、相槌では「はい」が大半を占め、「そう」系は使用されていない。完結型の相槌としては、「本当」という態度表明のある相槌が用いられている。

CとDでは、質問や確認に対する応答と相槌で使う語種を使い分けていることが興味深い。

E (中の上)：完結型の相槌にはいろいろなバリエーションがあり、「なるほど」という態度表明のある相槌も使用されている。促進型の相槌には「うん」、「ええ」があるが、「はい」は、全然使われていない。相槌以外の部分でも「あーそう、はい、わかりました」と「あ、はい」の2度しか使用されていない。指示に対する了解表現も、「はい」ではなく、「あ、そうそう」を使い、不適切なものとなっている。

F (上の下)：「はい」系と「そう」系のみではあるが、それぞれにバリエーションがあり、全体として必要な相槌は打てるようになっている印象を受ける。

G (上の中)：促進型の相槌としては「はい」を主に使い、完結型の相槌は「そうですか」を主に使用している。

H (上の上)：促進型の相槌としては、「はい」と「ええ」を主に使い、完結型の相槌は、「そう」のバリエーションを使用している。

I (超)：促進型の相槌は、大部分「はい」を使用しており、完結型の相槌は、「あーそうですか」、「あ、そう」、「あ、本当」を使っている。特に、ロールプレイで友達を誕生日パーティーに誘う部分では、「あ、そう」、「あ、本当?」、「うん」という待遇性の低い相槌を使い分けている。ACTFL-OPI 評価基準で、超級話者は、「大抵のフォーマル、インフォーマルな会話に効果的に参加し、十分的確に話すことができる。」<sup>7)</sup>とされているが、相槌使用においても待遇の適切な相槌を使用していることが指摘できる。

日本人1 (超)：被験者I同様ロールプレイで子供の相談に乗る場面では、「うん」、「あーそうか」という待遇性の低い相槌を使用し、試験官との対話部分では、「はい」、「そうですね」を使用するようように使い分けがなされている。

日本人2 (超)：上司と話すというロールプレイでは「はあ」という待遇性のより高い相槌へのシフトが見られる。

話題未確定の部分で打たれる促進型の相槌は、D・F・H・日本人2では「はい」、Gでは、「ええ」と「はい」、日本人1においては、「うん」と「ええ」、というようにそれぞれ特定化している。

### 3-2. 相槌直前の形式の分析—自発性と打つタイミング—

本研究の資料は、試験官が被験者に対して行ったインタビューテストであるため、単語末を上げ意味を確認するような部分がたまに見られる。このような上昇イントネーション、及び反応を待っているポーズ、それから今石 (1994) が相槌要求シグナルと呼んでいる終助詞・間投助詞の「ね」、の後に生じた相槌は試験官からの明示的な要求に応じてついた相槌である。これらの相槌の数を除き、被験者が自発的に打っている相槌の数を表4に示した。

小宮 (1986) は、テレビの対談番組とラジオの教育相談約20分ずつを資料として相槌使用の実態を調査しているが、その際、話し手の要請に応えたと考えられるものを排除している。小宮が排除したものは、話し手からの質問、命令、終助詞「ね」、ポーズ、に回答したものととどまらず、答え、意見の表明、感情の表明に応じたものも排除している。例えば(13)のような例は答えに対する応答として、(14)のような例は意見の表明に対する応答として除外しており、相槌とはしていない。

(13) K 海岸の方へは下りられる？

ACTFL-OPI 初級から超級に見られた相槌の分析

表4 相槌は自発的か

|      | A   | B   | C   | D   | E   | F   | G   | H   | I   | 日1  | 日2  |
|------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
|      | 初の上 | 中の下 | 中の中 | 中の中 | 中の上 | 上の下 | 上の中 | 上の上 | 超   | 超   | 超   |
| ～ね   | 8   | 0   | 2   | 9   | 2   | 3   | 5   | 4   | 2   | 6   | 10  |
| 上昇   | 2   | 1   | 0   | 0   | 0   | 0   | 0   | 0   | 0   | 0   | 0   |
| ポーズ  | 0   | 1   | 1   | 5   | 0   | 2   | 2   | 1   | 0   | 0   | 3   |
| 自発的  | 15  | 0   | 5   | 11  | 21  | 38  | 25  | 23  | 39  | 31  | 50  |
|      | 60% | 0%  | 63% | 44% | 91% | 88% | 78% | 82% | 95% | 84% | 79% |
| 相槌総数 | 25  | 2   | 8   | 25  | 23  | 43  | 32  | 28  | 41  | 37  | 63  |

H 下りられます。

K ハーソー。

(小宮1986より)

(14) S 家庭教師をお付けになるというよなことは、やっぱり、こう、無駄だと思います。

M ハーソーデスカ。

(小宮1986より)

本研究では、話し手からの質問、命令に回答するものは2-2で述べた様に相槌とは区別しているが、話し手の答え、意見の表明、感情の表明に回答するものに関しては区別していない。これらは、前述した3種のような明示的な要求ではないし、日本語学習者の場合、表現意図確定部分で打つ相槌は、被験者が話の流れを理解していることを示す重要なものと考えからである。

表4を見ると、Bは自発的には相槌を打っていないことが明らかになる。また、E（中の上）以上のレベルでは、自発的に打たれた相槌が約8割またはそれ以上になっていることが指摘できる。

今石（1994）は、電話での会話、ラジオの電話相談の番組を資料にして、相槌直前の形式について「形式」と「音声」の両面から考察をした。その結果、「けど」「ので」「て」などの接続助詞や間投助詞・終助詞の「ね」のようにもともと相槌の入りやすいものと、尻上がりイントネーションが伴われた際にはじめて、相槌が入るものがあると指摘している。

表5 相槌直前の形式

|       | A   | B   | C   | D   | E   | F   | G   | H   | I  | 日1 | 日2 |
|-------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|----|----|----|
|       | 初の上 | 中の下 | 中の中 | 中の中 | 中の上 | 上の下 | 上の中 | 上の上 | 超  | 超  | 超  |
| ～ね    | 8   | 0   | 2   | 9   | 2   | 3   | 5   | 4   | 2  | 6  | 10 |
| 接続助詞  | 5   | 0   | 2   | 8   | 11  | 21  | 10  | 10  | 16 | 22 | 22 |
| 文末    | 3   | 0   | 4   | 3   | 9   | 5   | 9   | 6   | 8  | 3  | 6  |
| 名詞    | 6   | 1   | 0   | 0   | 0   | 2   | 1   | 3   | 4  | 0  | 10 |
| 名詞+助詞 | 3   | 1   | 0   | 4   | 1   | 10  | 5   | 2   | 11 | 2  | 7  |
| それ以外  | 0   | 0   | 0   | 1   | 0   | 2   | 2   | 3   | 0  | 4  | 8  |
| 相槌総数  | 25  | 2   | 8   | 25  | 23  | 43  | 32  | 28  | 41 | 37 | 63 |

相槌を打つタイミングについての手がかりを得るために、相槌直前の形式について調べ、それらを終助詞の「ね」、接続助詞、文末、名詞、名詞＋助詞、それ以外に分類し、表5に示した。ここで、それ以外に分類したものは、副詞、形容詞、引用の「と」、名詞修飾の中に現れた動詞、試験官からの相槌などである。

初級者のAは、「ね」の後に生じた相槌が多少多い他は直前の形式に関わりなく相槌を打っているが、日本語レベルが上の学習者になると、接続助詞の後で相槌が打たれている例が多いことに気づく。相槌を打つ適切なタイミングとして、ポーズ、接続助詞で終わる部分、「ね」が添えられるところ、うなずきなどが話し手にある場合が指摘されている(堀口1991)が、接続助詞の後というのは、他の明示的な相槌要求に比べ、話の内容を把握していないと打ちにくい場所と言えるのではないだろうか。

### 3-3. 各被験者に見られる不適切な相槌使用

次にそれぞれの被験者の不適切と思われる表現について調べてみよう。ここでは、相槌として使用されたものを中心に、確認、質問、指示に対する応答も視野に入れ考察する。

A (初の上)：質問に対する応答にフーンという応答を数回している。相槌にも日本語ではない音が使用されている。そして、待遇性の低い「うん」が多く使用されている。

B (中の下)：相槌と分類されたものは「うん」と「はい」1例ずつしかないが、質問・確認に対する応答も「うん」と「はい」を区別せず使用している。

C (中の中)：相槌・質問に対する応答に下記のような不自然な「そうです」がある。

(15) R58：それは残念ですね。

C58：そうです。フッフッフ

(16) R110：日本人は遅れるのが嫌いですね。(そうです。)

「そうです」は、相手の意見表明などの時に「それは正しい」という同意を伝えるものなので、(15)のような場合は、「ええ」または「そうなんです」。(16)は、「そうですね。」が自然であると思われる。

D (中の中)：不適切なものは認められなかった。

E (中の上)：話題完結部の相槌に不自然な使用が4回見られた。下記の例のように相手の返事に対しての共通理解がないにも関わらず「そうですね」という同意を表す相槌を使うという誤用がある。

(17) R66：目白の方に行ってます。

E66：あ、そうですね。

また、3-1でも述べたように、「はい」を使用することがなく試験官の指示に対して、「そうそう」という応答をしている例が3回あった。

(18) R115：言っていただけませんか。

E115：あーそうそう。

F (上の下)：話題完結部での相槌「そうですか」のタイミングに問題のある例が2例見られた。

(19) 78R あ、ソウルの市長になったら、(あ、そうですか。) になったら、～

## ACTFL-OPI 初級から超級に見られた相槌の分析

G (上の中)：上司と話しているというロールプレイの際、「あ、そう」という待遇性の低い相槌が見られた。他にも確認に対する応答に待遇性の低いものが一例使われている。

H (上の上)：不適切な使用ではないが、友達と話すとというロールプレイの際、文末表現や接続詞は待遇性の低い形へのシフトが見られるが、相槌のシフトは起こっていない。

I (超)：誤用は見られなかったが、強いて挙げるなら、2-3で述べたように言語的にターン譲りはしているのだが、実際には、ターンを譲っていないところである。多少強引な話し方という印象を与えてしまうかもしれない。

日本人1 (超)：「うん」「ええ」「はい」など合計27回のうちの2回ではあるが、ロールプレイの場面以外で「うん」を使用している部分がある。

日本人2 (超)：インタビューの中頃から後半にかけて、対話部分に「うん」という相槌が表れる。

C・E・Fに見られたのは「完結型」の相槌である「そう」系を使用する際の不適切なものであった。C・Eでは語種の選択、Fではタイミングが不適切であった。GとHに見られたのは、相槌の待遇に関する誤用・非用であった。日本人話者にも相槌の「はい」と「うん」の混用は見られたが、子どもにアドバイスする、上司の要請を断るなどはっきりとした状況設定がある場合には、その状況に合わせた相槌を使用している。日本人話者に見られた混用は、不適切な例というより、被験者が試験官との関係を測りながら使用しているコミュニケーション・ストラテジーと理解できるのではないだろうか。

### 4. 日本語会話能力との関連

以上、分析してきた相槌の使用回数、種類、自発性、タイミング、適切性を被験者の日本語会話能力との関連においてまとめてみよう。

#### 4-1. 相槌の諸相と日本語会話能力との関連

相槌の使用数と会話能力レベルとの間にはだんだん多くなるというような相関は認められず、かなりの個人差が指摘できる。しかしながら、上級者以上は中級者以下のものより相槌を数多く使用していることが指摘できる。OPI インタビューは、被験者の発話サンプルをより多く抽出するような方法で行われ、上級者以上では被験者がかなり長く話す形態になっている。つまり、被験者は相槌を打つ側ではなく話し手になることが多くなることを考えると、この上級者以上の方が中級者以下より相槌が多いということには個人差を越えたものがあると考えられる。

今回分析の対象とした「相槌詞」の使用状況にも上級者以上と中級者以下では、違いが見られた。上級者以上では相槌として使用される「相槌詞」が多くなることがわかった。さらに、超級者では、「相槌詞」の80%以上を相槌とターン譲りが占めており、「相槌詞」は主に「相槌」と「ターン譲り」など、話し手の発話を助けるような機能で使用されていることが指摘できる。

どのような相槌を使うかには個人差があるが、使用語種の範囲の広がりにはレベルとの関連が窺われた。中級者以下の相槌にはどれも大きく欠けている側面が見られる。A (初の上)は語種は多く見えるが基本的に「うん」と「はい」のみであるし、B (中の下)は、相槌の表出はほとんどなく、C (中の中)は、「そうですか」中心で、「はい」という相槌は使われていないと言ってよく、

D（中の中）には、「そう」系のものは使われていない。E（中の上）の場合、語種は多いが基本的な相槌と思われる「はい」系が見られず、不適切な使用も多い。しかし上級者になると、促進型の相槌にはそれぞれに特定化したものがあり、完結型の相槌にはまだ問題もあるが、正しく使いこなせるものがある。そして、超級者は促進型も完結型も正しく使用できるものが数種あり、また、場面によって使い分けだけの語種がある。

試験官からの働きかけがない自発的な相槌は、E（中の上）以上とD（中の中）以下では違いが見られた。自発的に打たれた相槌はE（中の上）以上の被験者では約80%あるいはそれ以上あり、D（中の中）以下の場合との間に違いがあった。相槌のタイミングについても、E（中の上）以上とD（中の中）以下には違いが見られた。E（中の上）以上では、接続詞の後で打つことが多くなる。Eは、相槌の回数こそ少ないが、自発性、打つタイミングの理解においてその上のレベルの特徴をかなり備えていると言えよう。

#### 4-2. OPI 基準の相槌に関する記述の示すもの

各レベル一例ずつの分析ではあるが、OPI 基準の相槌に関する記述の具体的な内容について推論を試みる。

初級の上・中級の下での被験者では、完結型の相槌は使用されておらず、「うん」と「はい」との区別はなされていない。OPI のサブレベルの上は、その上の段階のことが半分以上できるとされる。中級で「言い換えや相槌が成功することは稀」と言うのは、このように相槌を打てることは打てるが、その語種の適切性はなく、タイミングも掴めない状況を言うのではないか。

中級の上・上級の下では自発的な相槌は、全体の相槌の大半を占めている。また、接続助詞の後で打たれる相槌が多い。促進型の相槌には特定化したものが見られ、回数も多いが、完結型に関してはタイミング・語種に不適切なものがある。中の上では、上級でできることの半分以上ができるようになることを考えると、「相槌の一部ができるようになる」ことは、促進型の相槌がタイミング良く上手に打てることと、自発的に打てるようになることにあるとあって良いのではないか。

上級の上・超級では、促進型、完結型ともに正しく使用できるものが数種ある。また、相槌を場面によって使い分けている点が指摘できる。ロールプレイで友達との会話や子供を説得する場面では、超級者 I や日本人被験者は相槌の語種を変えているのが見られた。

その他、分析中、超級者が他のレベルと異なっていると印象づけられたものに、「儀礼的否定」と「文の完結」が挙げられる。儀礼的否定は、Hでは1回、Iでは2回、日本人Iでは3回、日本人2では5回見られ、レベルとの関連が示唆できる。

「文の完結」は、2-1 で述べたように、広義の相槌に入れている研究者もいる。日本人被験者2人は一度も使用していないが、被験者Iには3度見られた。「文の完結」が使えるようになるにはそれ相応の会話能力が必要であることは想像に難くないが、「文の完結」を使用するかどうかは、使い手のスタイルに関連すると思われる。

超級で、「相槌に問題がなくなる」というのは、促進型、完結型ともに正しく使えるようになること、場面によって相槌を使い分けができること、「儀礼的否定」や、「文の完結」などその使い手のスタイルによって使いこなせることを意味するのではないだろうか。

## 5. 終わりに

今回対象としたのは、中級の中と超級（日本人被験者を含む）以外は各レベル1本ずつのテープであった。多くのテープの中からそのレベルの典型例と思われるものを選んではあるが、さらにデータを増やして分析を積み重ねていきたい。

本研究では、「相槌詞」のみを取り上げたが、「繰り返し」や、「文の完結」など広義の相槌との関連、また、他のコミュニケーション・ストラテジーとの関連なども調査する必要があるだろう。

被験者によっては、「はい」は、質問や応答に対する応答に、「そうですか」は相槌にというようにはっきりと使い分けているものもいた。実質的な意味のない短い表現ではあるが、日本語学習者はこのように一つ一つ習い覚えてゆくのである。今後、岡崎（1987）にあるような相槌のシラバスも考え、日本語教育に役に立つ形にまとめたい。

筆者を含む OPI リサーチグループでは、ACTFL-OPI 評価基準の具体化を目指して研究を続けている。今回のデータのもとになったテープ・書き起こし資料もその研究会で使用しているものである。

### 註

- 1) 中国語の相槌「嗯」は目上の者に対して使う丁寧な表現のためよく混同が起きる。
- 2) 7人の ACTFL-OPI テスターが各被験者の会話能力を個別に判定し、集めた評定を数量化し Pearson Moment Correlation Coefficient を利用し統計学的に分析した。その結果、どの二人の判定者間においても「 $P = .000$ 」という数値がでて、試験官間の信頼性が確認された。統計処理にはテンプル大学日本校の Faoud Chedid 博士の協力を得た。
- 3) 上級は従来二つに分かれていたが、1998年秋から正式に3つに設定されることになった。
- 4) ACTFL-OPI 評価基準の具体化を目指し、プロジェクトを続けている OPI ガイドライン研究班の7名。筆者を含む。
- 5) 水谷は「完結型」と名付けているが、今石の相槌の分類にある「完結型」と重なるので、本稿では「文の完結」とした。
- 6) 例文中のコロンは長い沈黙を示す。
- 7) バック キャサリン1995 「ACTFL-OPI 試験官養成用マニュアル」p. 72

### 参考文献

- 今石幸子 1992 「談話における聞き手の行動—相槌のタイミングについて—」『日本語教育学会創立30周年・法人設立15周年記念大会予稿集』
- 今石幸子 1993 「聞き手の行動—相槌の規定条件—」『大阪大学日本語研究』5
- 今石幸子 1994 「話し手の発話とあいづちの関係について」『大阪大学日本学報』13
- 岡崎敏雄 1987 「談話の指導—初～中を中心に—」『日本語教育』62号
- 奥津敬一郎 1988 「日本語における『はい』と『いいえ』の機能」『日本語教育の現代的課題』津田塾会40周年記念日本語国際シンポジウム
- 金 秀 芝 1993 「日・韓両言語における『あいづち』の対照研究—電話の会話を中心に—」『大阪大学日本学報』12
- 黒崎良暁 1987 「談話進行上の相槌の運用と機能—兵庫県滝野方言について—」『国語学』150



- 小宮千鶴子 1986 「相槌使用の実態—出現傾向とその周辺—」『語学教育研究論叢』大東文化大学語学教育研究所
- 齊藤眞理子他 1996 「日本語中級話者における発話分析—ACTFL-OPI 基準の具体化を求めて—」『JALT 日本語教育論集』第1号
- 曹 永 湖 1994 「談話における相づちの運用と機能」『東北大学文学部日本語学科論集』第4号
- 藤原真理 1993 「対話における相づち表現の考察」『東北大学文学部日本語学科論集』第3号
- 堀口純子 1988 「コミュニケーションにおける聞き手の言語行動」『日本語教育』64号
- 堀口純子 1990 「上級日本語学習者の対話における聞き手としての言語行動」『日本語教育』71号
- 堀口純子 1991 「相槌研究の現段階と課題」『日本語学』第10巻10号
- 松田陽子 1988 「対話の日本語教育学—あいづちに関連して—」『日本語学』第7巻第13号
- 水谷 修 1975 『日本語の生態』創拓社
- 水谷信子 1984 「日本語教育と話し言葉の実態—あいづちの分析」『金田一春彦博士古稀記念論文集』第二巻
- 水谷信子 1988 「あいづち論」『日本語学』第7巻第13号
- メイナードK. 泉子 1993 『会話分析』くろしお出版
- 渡辺恵美子 1994 「日本語学習者の相槌の分析—電話での会話において使用されたあいづち—」『日本語教育』82号
- Buck, K(Ed.) 1989 The ACTFL Oral Proficiency Interview Tester Training Manual. Yonkers, NY: The American Council on the Teaching of Foreign Languages. [日本語 OPI 研究会 翻訳プロジェクトチーム訳 『ACTFL-OPI 試験官養成用マニュアル』1995 アルク]